

私たちが、植物の種を蒔く場合、土をよく耕した畑に、穴を掘ったり、溝を作ったりして、そこに慎重に種を入れては、土をかぶせ、最後に水をやって、世話をするのが普通です。無駄になることが最初から分かっているような場所に種を蒔いたりはしません。

日本では、小学校など、春に朝顔の種を小学生がひとりひとり蒔いて、その成長を観察しましたし、ヒマワリやスイカにしても、そうです。また、お米をつくるために田植えをする時、私は高校生の頃まで広島県の福山にいましたが、春に梅雨の雨に合わせるかのように丁寧に植えてゆきました。

宮崎に来てからは、稲を1年に2回植える、小学校の時習った、二期作のために春のはじめに1回目の田植えをしているので、驚きました。しかし、今は機械で植えるのが多いのですが、稲をひとつひとつ大切に植えられているのがよくわかります。

ところが、イエス様が活動された頃のイスラエルでの種まきは、それとは違っていました。

今日の、種を蒔く人のたとえは、おそらく麦の種を頭に描いての話でしょう。麦を蒔くのが秋であることはよく知られていますが、もう少し説明が必要でしょう。

イスラエルは日本と違って、夏には雨は降りません。8月から9月、2か月エルサレムに居たことがありますが、8月には空を見上げて、雲一つでできません。9月にやっと雲がでてきましたが、雨が降ったのは1日だけでした。冬に雨が降る、地中海性気候という気候です。

秋になって、小麦や大麦の種を畑に蒔き、そこに、動物の首に、くびきをかけて引かせる鋤を使ってその畑を耕させ、それから冬の雨を待つという手順だったようです。

4種類の土地が、たとえ話には出てきましたが、「道端」というのは、お百姓さんが歩いたためについた畑の中の道であって、車が往来するような道路のことではないでしょう。「石だらけの所」というのは、岩の多い土地のことです。しかし風で土が運ばれて来ると、「道端」も「石だらけの所」も、種まきの時期には、あまり区別ができなくなるようです。「いばら」というのも、夏の間、枯れたように、土の中に残っていた、いばらの根から、冬の雨によって芽を出し、後になって茂ってくるのであって、種まきの時には、見えなかったものです。

そんなわけで、4種類の土地というのは、同じ畑の中で、少しずつ種を取り巻く環境が違ったところを説明した話であって、わざわざ道路の真ん中とか、岩のごつごつした荒れ野に種を蒔きに行った、というわけではありません。ましてや、茨が生い茂っている中へ種を入れた、ということでもありません。

ですから、2000年前にイエス様から、この種まきの話を聞いた人びとは、私たちよりも、違和感なく、この話を聞けたらと思うます。

ここで、私たちが陥りやすい読み方として、自分を、この4種類の土地のどれにあてはまるか、という読み方です。それこそ、血液型が、これも4種類ありますが、あの人がこんな行動をするのは、B型だから、などと考えてしまうのですけれど、それと同じように、「あの人は道端タイプ」「あの人は石だらけタイプ」「あの人は茨タイプ」という風に、他人や自分にレッテル貼りをするのが正しい読み方、と思われています。

確かに、今日の福音書の1節から9節が「種を蒔く人のたとえ」であるのに対して、18節からは、「種を蒔く人のたとえの説明」ということになっていて、説明の方では、4種類のタイプを解説しています。

しかし、このような、人間を4つのタイプに分けることが、このたとえ話の目的だったとは、思えません。

皆さんは、ファイブゴスペルズ、という本をご存知でしょうか。現代の新約聖書の学者さんたちが、イエス様のことばについて、「本当にイエス様が言われた言葉か」「これに近いことを言われたか」「イエスさまらしい雰囲気は感じられるか」「まったくイエス様が言われたとは思えない」その4つに分けて、4つの福音書とトマス福音書を投票で色分けしたのです。そうすると、前半のたとえ話の部分は、高いほうから2番目で、おそらくこれに近いことを言われただろうが、後半の説明部分は、初代教会の人々が、道徳的指導をしようと思って書き加えた、一番ランクの低い部分だ、というのです。

イエス様ご自身は、種を撒いている人のことが言いたかった、あるいはその人が蒔いた種そのもののことを話したかったのだろうと思われるのです。

以前、ギデオン協会の人からこんなことを聞いたことがあります。ギデオン協会というのは、無料で新約聖書を配る団体です。無料で新約聖書を配るのだから、みんなから喜ばれるだろうと思ったのですが、学校の門の外で、下校中の生徒に渡したら、家に帰って親に見せた。すると、最近「モンスター・ペアレンツ」（怪獣のような親たち）というのが、学校の先生たちに、おかしい言いがかりをつけてくるらしいのです。それで、聖書を配る前に、事前に学校に挨拶に行くと、「モンスターペアレンツが文句を言うので、できたら配らないでくれ。」ということらしいのです。

お金を取るのではなく、無料で配布することさえ、文句を言われて、いろいろと苦勞があるらしいのです。

もう30年以上前のことですが、ギデオン協会で聖書を配布していた人が、昔を懐かしがって、「聖書を配る時、ギデオン協会の先輩は、『パンを水の上に投げるんだ。』と言われていた。」と話してくださいました。

今は新共同訳聖書ですが、当時は、口語訳聖書で、旧約聖書の伝道の書と言われる書物の11章1節に「あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである。」という言葉があるんですね。現在の新共同訳では、コヘレトの言葉11章1節ですが、「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見いだすだろう。」という言葉になっています。

最近賞味期限の来た食べ物をお店では捨てる、というのがもったいない、ということでコンビニでも賞味期限が迫っているものを、安売りするような、「もったいない」ということが話題になっている時代です。ところが、生活の必需品のパンを、水の上に投げよ、川に浮かべて流せ、と伝道の書、コヘレトの言葉は私たちに言うのです。

パンは、聖書を象徴しているとも言えます。わたしたちが生活するためには、体にパンが必要なように、心には、聖書の御言葉が必要だ、ということでしょう。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るひとつひとつの言葉で生きる」という言葉からもそう言えるでしょう。

その大切な聖書を、すぐにゴミ箱に捨てるかもしれない生徒に渡して、効果があるのか、という批判があります。しかし、ギデオン協会の人びとは、このコヘレトの言葉を信じて、いつかこれが実を結ぶ時が来る、と信じて配っているのです。

同じように、新約聖書にも有名な言葉があります。

ヤコブの手紙1章21節

「だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。」

これを以前の口語訳聖書で読むと

「だから、すべての汚れや、はなはだしい悪を捨て去って、心に植えつけられている御言を、すなおに受け入れなさい。御言には、あなたがたのたましいを救う力がある。」

『御言にはたましいを救う力がある』と言うのです。

古代エジプトの壺が発見されたら、その中に、種があつて、何千年もの眠りから覚めて、芽を出した、というニュースが、昔ありました。日本でも、万葉の頃のハスから花が咲いた話があります。種には、生命力があるわけです。そして、聖書の言葉にも、やはりそれ自体に力があることを私たちはギデオン協会の人びとと同様に信じようではありませんか。

道端に落ちて鳥に食べられた種以外は、石だらけの土地や灰の中に落ちた種も、ちゃんと芽を出したことに、私たちはもっと注目する必要があるでしょう。効率のいい、良い土地だけに種を蒔くのではなく、効率が悪いのではないかと考えてしまうような、川の上にパンを投げるようにして、御言葉を伝えてみる。手紙に聖書の言葉を添えてみる、とか、教会からの案内に、何か言葉を添えてみる、そんなことの一つ一つに、私たちは御言葉の力が働くような気持ちがするのです。

そんなチャレンジを、イエス様は弟子たちや群衆への説教で語られたのではないのでしょうか。